オンデマンド復刻版『古典球アンプの作り方 楽しみ方』に登場したアンプの音質自己紹介(2)

新　忠篤

前月に続き，「古典球アンプの作り方 楽しみ方」に登場したアンプの，出来上がった直後の印象を掲載する．

その昔，私が自作アンプの音の印象を書いていることを，あるアンプ製作者でオーディオ評論家のかたから“製作者が自作のアンプの音のことを書くのは，自分の子供のことを評することと同じで，親馬鹿マルダシである”と批判されたことがある．いま振り返ってみると，そのかたは，アンプは特性そのものが，音を含めてすべてを物語っている，と考えていたらしい．でも私は，音の印象を記述することを止めなかった．アンプを追試される読者に，音を言葉で伝えることは製作者の義務である，と信じていたからだ．

こうして私が年齢を重ねた現在，過去に製作したアンプがすべて手元にあるわけではないから，記事を読んでいただいた読者と同様，こういう音だったのかと自分自身に記憶を呼び覚ませてくれた．あのとき音について書くのを中止しなくてよかったと思っている．

(1) WE-205D単管シングル (0.8W) でWE-540AW”陣笠”を鳴らす (1996年8月号)

8Ω端子にセレッションSL-700をつなぎ，まず音出しテストをする．CDプレーヤSTUDER A-730のヴァリアブル・アウトを本機の入力につないだ．ドリス・デイのモノーラル時代の録音「デイ・バイ・デイ」(COLUMBIA U.K.745749-2) のCDから「枯れ葉」をかけてみる．

スパッとカミソリで切ったようなウェスタン・サウンドがとび出す．声はソフトでほの甘く，ストリングスの鮮やかさに耳を奪われる．ハープは弦が1本1本目に見えるようにきらめく．

聴きなれたこのCDだが，今日の音はひときわ美しくきこえる．

次にスピーカを8Ωのダミー・ロード抵抗に変えて，フリクェンシー・テストCDをかける．出力を150mWにセットして測った．100Hzが−2dB，4kHzで+1.4dB，8kHzで+5dBの特性である．残留ノイズは21mVとかなり多い．B電源の残留リプルと205Dのフィラメントを AC点火した結果のハムもあると思う．このハイ上がりの特性は，入力トランスのキャラクタと見た．2次インピーダンスが240kΩのトランス (WE-282A) なので，2次側に1MΩを入れてみたら10kHzが+1dBになったが，最終決定は560AWをつないで，1できめたかったので，とりあえず1MΩはなしのままにした．

ここまでは自宅でのテストである．本機が出来上がったのは6月2日の日曜日 (1996年) の夕方．私の560AWマグネチック・スピーカは，先月から本誌編集部に預けたままになっている．編集部に電話をしてみたが，いつも休日返上で忙しい編集部には誰もいない．早く目的のスピーカを鳴らしてみたかったので，出来たてのアンプを提げて，ウエスタンサウンド・インクを訪れた．お店には迷惑と思ったが，ここには540AWが何台か展示され，またWE-755Aも鳴らしてみたかったからだ．

PHILIPSのLHH-300Rの出力を本機につなぎ，WE-540AWを鳴らしてもらった．実に美しい音で鳴りはじめた．音量もかなり上げられる．しばらく聴いていると，どのスピーカが鳴っているか聴きわけられないほど，自然な音に変化した．

出力インピーダンスを8Ωに切り換えてWE-755Aを鳴らしてもらった．この広帯域のスピーカは，アンプの周波数とおりの音であった．ヴォーカルでは子音(サ・シ・ス・セ・ソ)が目立ち，シンバルが目立ちすぎて，どうにもバランスがよくない．やはり755Aでは，入力トランスの2次側を1MΩでターミネイトする必要があると感じた．でも十分な音量で755Aは鳴っている．0.5Wの出力はこの高感度スピーカをたっぷりと鳴らすことがわかった．

本機のグレード・アップにはインプット・トランスをかえればいい．以前WE-311Bアンプに使った

WE-285P (500Ω : 200kΩ) がベスト・マッチングではなかろうか．本格的な出力トランスをつければさらに高音質が狙えるはずだ．MagneQuestのDS-050は最良と思う．出力トランスを使っても，205Dのプレートから4μを通してマグネチック・タイプのスピーカも使える．

(2) RCA45プッシュプル・パワー・アンプの製作

(1996年11月号掲載)

試聴テストにあたって，まずハム・バランサを，ハム最小ポイントにセットした．8Ωで0.7mVが整流管80と出力管45だけが動作したときの残留ノイズである．ライン・アンプ部のWE-352A，WE-311Bはヒートアップに約45秒かかる．ライン・アンプが加わったトータル残留ノイズは2.8mVになった．この部分のゲインが約50dBとハイ・ゲインのためである．シャーシはボンネット付のためWE-352Aにはシールド・ケースを使用しなかったが，オープン型のシャーシに組む場合には，WE-352Aにシールド・ケースが必要である．

まずTelarc Jazzの最新CD「ジェレミー・ダヴェンポート／ファースト・ジェレミー (Tealrc PHCD-1535) から3曲目の「誰にも奪えぬこの想い」を聴いてみる．これはガーシュインの名曲だが，オン・マイクで録られたダヴェンポートのヴォーカルとトランペットは，このうえなく生々しい．ベースの深い響きとまろやかな鳴りかたもこの45PPはかなりの特徴がある．ひと口にずいぶん大人っぽい音で，私は気に入ってしまった．

次にソプラノのシルヴィア・マックネアがアンドレ・プレヴィンのピアノ，デイヴィッド・フィンクのベースで入れたハロルド・アーレンの作品集「カム・レイン・オア・カム・シャイン」(PHILIPS PHCP-1801) から「虹の彼方に」を聴いた．プレヴィンお気に入りのベーゼンドルファーのイントロのあと，マックネアの歌うヴァースに入る．そういえば，この曲のヴァースはあまり聴いたことがない．余談になるが，つい数日前，毎日新聞に掲載されたベーシスト，レイ・ブラウンのインタヴューを読んでいたら，最近はヴァースが流行らないそうで，いきなりメイン・シームに入る場合が多くなっているそうだ．

クラシック歌手が歌うジャズには，何となく違和感のあるものが少なくないが，さすがにアメリカ生まれのマックネアは，まったく自分の音楽になっている．それにしても，なんとあたたかくインティメートな歌と感触．実にやさしい．プレヴィンのピアノもまったくすばらしい．このアルバムの第12曲「ペーパー・ムーン」では，マックネアは心地よくスイングしている．

45PPは低音部に特徴があるように思う．ベースがズシンと響くのは，205Fや300Bとも違う．そうだ，この低音の鳴りかたは，あの86アンプの鳴りかたにちょっと似ているかな・・と思ったりした．

続いてもう1枚，クラシックの歌い手によるジャズを聴く．メゾソプラノのフレデリカ・フォン・スターデのニュー・ディスク「フレデリカ・フォン・スターデ・シングス・ブルーベック」(Telarc PHCD-5159, CD 80467)．75歳を迎えたデイヴ・ブルーベックの作品をフォン・スターデが，ブルーベックの2人の息子クリスとダンに加えて数人のジャズ・ミュージシャンのバックで歌うメローなフィーリングは，45プッシュプルのこのアンプにぴったりだった．ブルーベック最大のヒット・アルバム「タイム・アウト」の中にあった「ストレンジ・メドウラーク」や「ブルー・ロンド」等が，ここでは歌詞がつけられてフォン・スターデが歌っている．思わず昔がなつかしくなってしまう．

さらにもう1枚，ヴィクトリア・ムロヴァのパガニーニ：ヴァイオリン協奏曲第1番 (PHILIPS PHCD-615) の第3楽章を聴いてみたくなった．この曲，アンプによっては鋭利なカミソリのように鳴ることがあるが，この45PPではムロヴァのヴァイオリンが血のかよった，ぬくもりのある音に変わったのに驚かされる．ソロもオーケストラも楽器がすべて立体的に鳴り，ホールに消えていく残響は何とも美しい．

試聴には，いつものセレッションSL-700 (スピーカ) とSTUDOR A-730 (CDプレーヤ) を使った．

今回思いきって製作した45PPはWEの小型出力管WE-311Bを前段に起用したこともあろうが，トランス結合によるA1クラスPPアンプが，何ともいい音で心を捉えて離さない．45PPがこれほど魅力あふれる音だとは，まったく予想していなかった．独特の低音，まろやかな中音は，シングルにあった頼りなさをみじんも感じさせないとは，うれしい驚きであった．この音を聴いて，初めて諸先輩が45を名球に挙げている意味が理解できたといっていい．

(次号に続く)